

苦は自分を成長させてくれる 仏さまのはからい。

掛川教会 今泉有紀子さん

2015年10月、39年間連れ添った夫が突然他界し、一億円を超える負債を抱えた会社を引き継いだ。しかし、営業の経験もなく、取引先との交渉や現場作業などわからないことばかり。大きなプレッシャーで押しつぶされそうなとき、日ごろから悩みを聞いてくれる仲間から「会社がうまくいってもいなくても、どっちも仏さまのはからいだから、いいじゃない」と言われる。無責任と感じつつも、自分の言動を振り返る。そして、「負債という苦は、自分を成長させてくれる仏さまのはからいだ。先のことを憂うより、今できることを精一杯する」と心を定めた。すると、自分の力だけでなんとかしようという頑な気持ちがほぐれていった。夫が他界して2年が過ぎたが、従業員は全員辞めることなく頑張ってくれている。家族や仲間の支えもありなんとか今日まで歩んでこられた。今泉さんは、今度は自分がまわりの人を支えていく番だと覚悟を決め、さらに、「夫に『お前と一緒に頑張ってよかった』といってもらえるように、がんばります」と語る。



円満な人になる

円満とは、人格が「十分に満ち足りて、欠点や不足ないこと」です。ですから「円満な人になる」といえば、いわば人間の理想に近づくことで、仏教徒にとっては仏さまのような人になることを意味します。しかし、だからといって遠い目標ということではないと思います。

江戸時代、現在の奈良県吉野に暮らした清九郎という妙好人(浄土真宗の篤信者)は、留守宅にあったお金を盗まれたとき、こういったそうです。「私のような者の家に盗みに入るその方は、よほど困っていたのでしょう。たまたまわが家にお金があったのでその人も得るものがあり、うれしく思います」と。そして、「私はいま、仏の慈悲に導かれて、盗まれる身にさせてもらい、これほどうれしいことはありません」と語ったということです。

こういう方の心には、み仏に生かされていることへの感謝と、人に対する慈悲、思いやりがあるばかりです。ところで、この清九郎さんは父親を早くに亡くし、母親との貧しい暮らしのなかで出会った妻とも、三十三歳のときに死別しています。悲しみやつらさを、とことん味わったからこそわかる、人の心の痛み。そこからわき出る慈悲の思いが、おのずから人を救う智慧を発さしめたのでしょ。